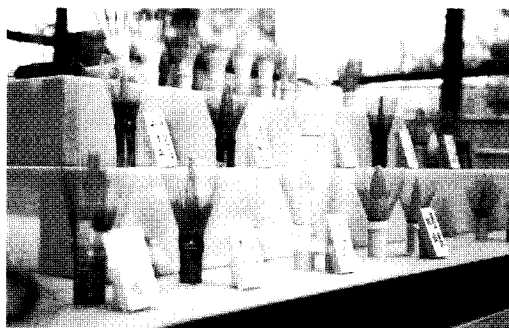




高山竹林園の資料館に展示された茶道流派茶筌

院御銘「高千穂」茶筌の姿は判断がつかず、まぼろしの茶筌」となった。

高山八幡宮の宮座に無足人座（茶筌師座）という祭祀集団がある。無足人は

田地を持たず扶持米を受けた武士層だ。茶筌師は中世、地名を負い「鷹山（高山）氏」を名乗った豪族の家臣（無足人衆）の後裔という。

茶筌製作は昔は一子相伝で仕事を人に見せるのを嫌い「来客があると手を休め技術流出を防いだ」。高山では茶筌を「茶筌」と書く。「技術を伝へし竹の特質を全部活かす」という自負の証だ。茶筌は湯になじむと竹本来の姿に戻ろうとし、精緻、優美な穂並びは崩れる。茶筌はしかし「姿だけのものではない」という。「その姿を造りなした削りの妙味と使い易さに生命」があり「時には貴人の手にも触れ、

人と人との交わりを深める役目」（『高山茶筌』）を果たすのである。

風籟さわぐ浪々流転の傭兵

竹の生態園や資料館を整備した高山竹林園が坊殿と呼ばれる丘陵にある。法楽寺末の円楽寺（廃寺）があったところ、鷹山氏の墓所である。今も一角に十数基の五輪塔が並び、苔の碑面に歴代統領の名を刻む。竹林が激しく擦れ合う風籟は、乱世の野を駆けめぐった豪族の雄叫びだろうか。

『鷹山家略譜』などによると、鷹山氏が史上に現れるのは十五世紀半ば（室町中期）の頼栄の時代だ。中世大和の領主は興福寺だった。高山に興福寺の庄園があり「その庄官として活躍したのが在地領主鷹山氏」（元興寺文化財研究所『中世村落寺社の研究調査報告書』）という。応仁・文明の乱をはじめ、荒れる土。探偵に傭兵としてかり出され、筒井、古市氏らとともに大和十八人衆の武士団に成長した。かたわら「茶祖」とされる南都称名寺の村田珠光から茶筌を教えられ、頼栄の子の頼秀、頼春兄弟、孫の頼宗（父頼秀）は「茶筌上手」で知られたという。

頼栄から六代の頼貞、頼盛兄弟は戦国期、松永久秀に与し信貴山城に拠った。天正五（一五七七）年、織田信長に攻められ、久秀は火薬を仕掛けた茶湯の名器「平蜘蛛」の茶釜を抱いて自爆。頼貞は荒木村重の有岡城（摂津伊丹）へ脱出したが、この城も信長の攻略にあい頼貞は有岡城内で自決した。頼盛は甲斐の武田勝頼を頼り落ち延びたが、織田・徳川連合軍との長篠の戦いで討死した。

頼貞に実子がなく、連枝一族の頼が跡を継ぐ。大和二見五条の城主、松倉重政の家臣となり、重政の島原転封に随従したが、キリシタン殉教で名高い島原の乱の直前に病没。頼は子の頼茂を外祖父で南田原城主、坂上尊忠に預け、頼茂は尊忠の仕官先、大阪城内で成長する。

その尊忠は慶長二十（一六一五）元和元年の大坂夏の陣で討死。頼茂は大坂城落城後、高山に帰り蟄居し、長じて美作国津山の森氏、母後国宮津の京極氏と仕官先を転々、晩年大和に隠棲するまで平穩の日はなかった。中央の覇権争いに投じ浪々流転、敗者に従った地方豪族の悲運が偲ばれる。

現在の東大寺大仏を造った公慶上人は、頼茂の宮津在任中に生まれた子である。